

平成 30 年度 第 2 回 大阪府立刀根山支援学校 学校運営協議会議事録

日 時 平成 30 年 11 月 19 日 (月) 15:00~16:30

場 所 本校 会議室

運営協議会委員 (敬称略)

- 委員 井村 修 (大阪大学大学院人間科学研究科 教授)
川上 麻衣 (大阪府立刀根山支援学校 保護者代表)
斎藤 利雄 (独立行政法人国立病院機構刀根山病院 神経内科医長)
高畠 俊英 (豊中市教育委員会児童生徒課 主幹)
平賀 健太郎 (大阪教育大学教育学部 准教授)
山田 亨 (学校法人大阪滋慶学園 教育顧問)

1 校長挨拶

2 協議事項及びいただいたご意見

(1) 学校経営計画の進捗状況について

① 学力向上 (ICT 教育について)

○病弱では、ICT は大切。VR カメラなどで原籍校の教室の映像をリアルに感じられるなど、復学のイメージが持ちやすい。一方で、あまりにもリアルになりすぎると、なくなった時の喪失感が怖い。また、同じ入院している子どもとの時間も少なくなるのではないかと。ICT を扱う場合は、注意する必要がある。

○ICT 教育について臨場感は良いが、機器にかなりのコストやレンタル料がかかる。また、ロボット操作などは子どもにとっては難しい為、簡単に動かせる方法なども考えていく必要がある。

○全府立学校に、設備が未だ整っていないのではないかと。また、遠隔教育での出席扱いというお話があったが、そのような教育が今後進んでいけば院内学級のあり方が問われる。ICT 機器を学校で用意するのか、個人で用意するのかという問題も出てくる。

○院内学級のあり方が問われる。院内学級の教員は、教科指導をしているだけではない。児童生徒が病気を乗り越えていくための心の教育も行っている。ICT という技術だけであれば、病弱教育はいらない。だからこそ ICT 教育を今後さらに慎重に進めていく必要がある。

○ICT 教育に関しては、今後、不登校などの問題にも関係するのではないかと。

○今まで ICT と聞くとプラスのイメージがあったが、今までのお話を聞いて難しい面もあるのだと感じた。

○これまで振り返ると、支援学校が一番 ICT 機器を使っていたように感じる。現在感じるのは、10 年経てばおそらく ICT 教育によって「通学」という概念がなくな

るのでは、と思う。世界の流れは凄まじいスピードで変化している。変化に対応できるように万全な準備が必要である。

①学力向上（道徳教育について）

- 検定教科書については、まだ支援学校に合うような専門本などは出ておらず、なかなか難しいのではないかと。
- 普段の子どもの様子と、授業での子どもの様子が異なっていればどのように評価するのか、非常に難しい。

②センター的機能の発揮

- 卒業後の生活などのお話は参考になるので、今後もやっていただきたい。

③組織力の向上

- 小中学校の校長会で、広報活動をするのはどうか。受ける側は有り難いが、現場の教員にとってはかなりの負担になるのではないかと心配。
- すべて大切なこと。院内学級を活かしたセンター的機能をしてみてはどうか。小中学校の院内学級では、専門性があまり持てていないように感じる。不安に感じている先生方も多い為、研修会を開くなどして専門性を共有していくことも大切である。
- まだ学校を超えてのサポートはできていないように感じる。「刀根山にいけば何かがある！」というような印象を作っていけばいい。刀根山には刀根山の良さがある。開かれた学校といいつつ、支援学校内部には中々入っていけないのが現状である。

3 報告・連絡

- (1)学校行事紹介（大阪精神医療センター分教）
- 2)教科書採択結果
- 3)学校いじめ防止対策基本方針の改訂について